

『西2丁目地下歩道映像制作プロジェクト』の2020年度委嘱作家として、世界的に活躍する映画監督アピチャップン・ウィーラセタクン氏が決定！
2021年4月1日より、新作映像作品の上映を開始します！



photograph by Chai Siris

- 高さ約2メートル×幅約12メートルの超横長スクリーンを活かし、3つの画面で6つの映像が交差する、実験的な映像作品を予定。
- 公共空間で上映される、本人にとって初のパブリックアート作品。

「西2丁目地下歩道映像制作プロジェクト」は、さっぽろ地下街オーロラタウンと札幌市民交流プラザをつなぐ“西2丁目地下歩道”を舞台にした映像制作のプロジェクトです。通路上に4つのプロジェクターを設置しており、高さ約2メートル、幅約12メートルの超横長の特殊なスクリーンを構成しています。

本プロジェクトでは毎年1～2組の作家に依頼し、この特殊なスクリーンと、日常的に様々な人が行き交う歩行空間という特殊性を活かした作品制作を行っています。この場所のための実験的で多様な作品が、年々増えていく予定で、現在は3作品を上映中です。

4月1日からは、アピチャップン氏による新作がラインナップに加わります。世界的な映画監督が、この場所のために手掛ける作品がどのようなものになるのか、どうぞご期待ください。



スタジオロッカ《UNDER UNIVERSE》2018年度作品

アピチャップン・ウィーラセタクン

1970年タイ・バンコクに生まれ、タイ東北部イサーン地方、コーンケンで育つ。コーンケン大学で建築を学んだ後、シカゴ美術館付属シカゴ美術大学で映画制作修士を取得。1993年に短編映画、ショート・ビデオの制作を開始し、2000年に初の長編映画を制作。1999年に「Kick the Machine Films」を設立。既存の映画システムに属さず、実験的でインディペンデントな映画制作を行っている。長編映画『ブンミおじさんの森』で2010年カンヌ国際映画祭最高賞（パルムドール）受賞。映画監督として活躍する一方、1998年以降、現代美術作家として映像インスタレーションを中心に旺盛な活動を行っている。2009年の大規模な映像インスタレーション「プリミティブ」は、ドイツ・ミュンヘンのハウス・デア・クンストにはじまり、数多くの美術館を巡回。2012年にタイの写真家・美術家のチャイ・シリと協働でドクメンタ13に出展、2013年に参加したシャルジャ・ビエンナーレではチャイ・シリとの協働作品が金賞を受賞。同年に福岡アジア文化賞を受賞している。2015年には初の上映パフォーマンス作品《フィーバー・ルーム》を韓国・光州のアジアン・アート・シアターで発表し、各都市で公演が続いている。

札幌との関わりとしては、2001年に札幌アーティスト・イン・レジデンス実行委員会（現・NPO法人S-AIR）の招聘により、札幌にて人生初の滞在制作を行っている。2021年4月、西2丁目地下歩道映像制作プロジェクト（札幌文化芸術交流センターSCARTS）にて、新作を発表予定。地下通路という公共空間にて上映される今作は、自身初のパブリックアート作品となる。

<広報のお問い合わせ>

札幌文化芸術交流センター SCARTS

TEL 011-271-1955

E-mail s.oyama@sapporo-caf.org（担当：小山）

プロジェクトの詳細はこちら▶



現在上映中の作品と映像プロジェクトについて

現在は、2018 年度～2019 年度に制作された3つの作品を上映しています。どの作品も、西2丁目地下歩道の空間から発想され、制作されたものです。

西2丁目地下歩道映像制作プロジェクトでは、4面プロジェクションによる超横長の特殊なスクリーンと、地下歩道という特殊な状況を、アーティスト独自の視点で捉え、より実験的で多様な作品を制作していきたいと考えています。

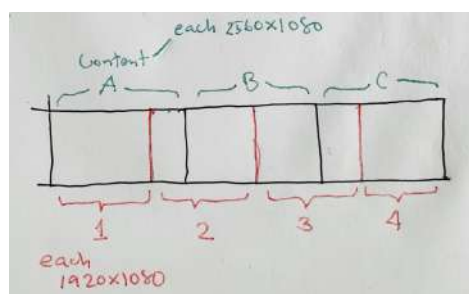
西2丁目地下歩道は札幌市民交流プラザの入り口であり、日常的に様々な方が通る通路でもあります。将来的には、いつでもバラエティ豊かな作品に出会える、いつ通っても新しい出逢いがある、そんな場所にできたらと考えています。



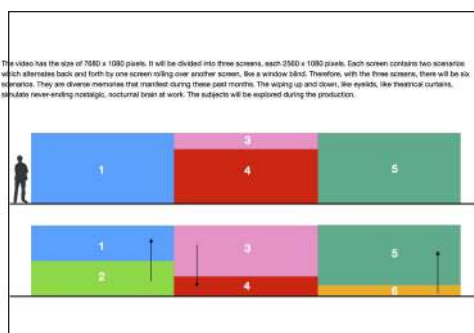
野口里佳《虫・木の葉・鳥の声》
2019 年度作品



大木裕之《トシシ》2019 年度作品



アピチャップン氏からの作品構想メモ



6つの映像の動きについてのプラン図



アピチャップン・ウィーラセタクン氏の制作について

アピチャップン・ウィーラセタクン氏は、若い頃に札幌に滞在したことがあります。美術の分野では、アーティストが長く一定の場所（普段拠点としている場所ではない場所）に滞在しながら、その場所からインスピレーションを受けて作品を制作したり、リサーチをしたりする「アーティスト・イン・レジデンス」という取り組みがあり、この取り組みを札幌で長く行っているNPO 法人 S-AIR（当時：札幌アーティスト・イン・レジデンス実行委員会）が 2001 年にアピチャップン氏を札幌に招聘しています。氏がカンヌ映画祭などで賞をとる前の、まだ若い頃です。その際、アピチャップン氏は地元の美術学生やボランティアと関わりながら、映像作品を作ったり、作品制作にむけた実験のようなことを行い、札幌の人々との交友を深めました。今回アピチャップン氏にお声かけするにあたって、NPO 法人 S-AIR の協力を得ています。

また今回、コロナ感染症の影響で渡航が制限されているため、制作にあたってアピチャップン氏の来札は実現していません。しかし、上映場所となる地下歩道の様子を撮影した映像を送ったり、氏から提出されたプランに合わせてこちらで映像の実験を行い、それを撮影してビデオで見ってもらうなど、オンラインを経由したやりとりをしながら、制作を進めています。

作品の上映時間について

4月1日以降、現在の3作品とアピチャップン氏の作品を加えた4作品で上映プログラムを組み、上映していきます。どの作品も毎日複数回上映される予定です。

詳しいタイムスケジュールは SCARTS ホームページにて後日発表します。



西2丁目地下歩道映像制作プロジェクト 2020年度委嘱作品概要

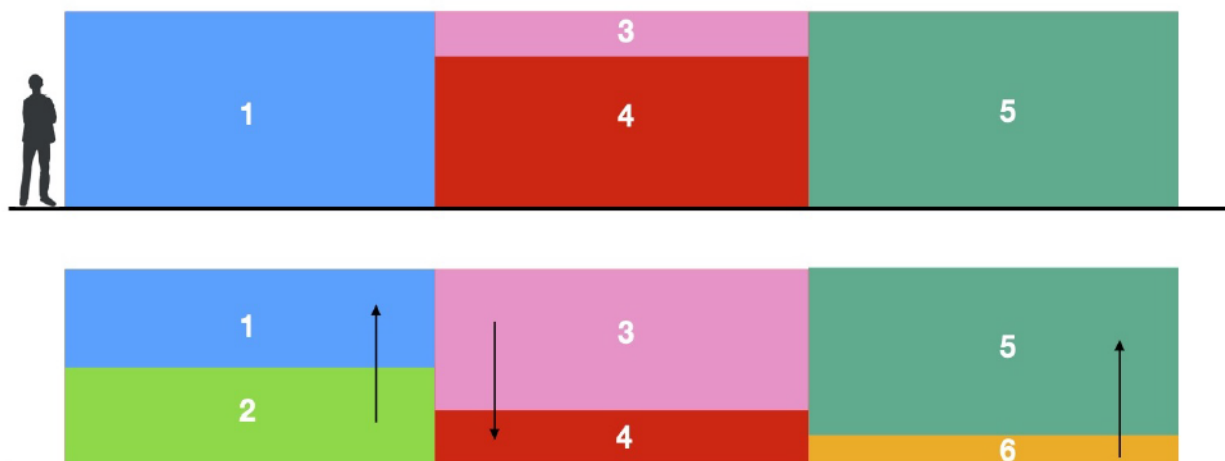
作家：アピチャップン・ウィーラセタクン
作品タイトル：The Longing Field（仮題）
タイトル仮訳：憧れの地
音声：セリフなし、日本語字幕あり（予定）
上映時間：約7分（予定）
完成年：2021年
仕様：7680×1080
画面：3面マルチ

作品について

3画面に映像が投影されます。
3つの画面（左—中—右）のそれぞれで、2つのシナリオが展開してゆきますので、
合わせて6つの映像が映し出されます。
各画面は窓のブラインドのように上下し、画面上のシナリオも前後します。

映し出される映像は、過去数ヶ月における”記憶”です。
ブラインドのように、瞬きのように、舞台の緞帳のように、
それぞれの画面は上がったり、降りたりします。
終わることのないノスタルジー。夜でも終わらない脳の活動。
そうしたものの反映でもあります。

The video has the size of 7680 x 1080 pixels. It will be divided into three screens, each 2560 x 1080 pixels. Each screen contains two scenarios which alternates back and forth by one screen rolling over another screen, like a window blind. Therefore, with the three screens, there will be six scenarios. They are diverse memories that manifest during these past months. The wiping up and down, like eyelids, like theatrical curtains, simulate never-ending nostalgic, nocturnal brain at work. The subjects will be explored during the production.





「憧れの地（英題：The Longing Field）」

アーティストステートメント

ロックダウンの数カ月間、私は友人でもある俳優たちを訪ねたいという強い衝動に駆られた。この特異な期間、俳優らがどうしてるのかを記録してみたかった。東北では、ジェンジラーがアメリカ人の夫のためにマスクを縫っていた。彼女は夫と一緒に暮らし、在宅で介護している。近くの街では、パティパーンが演奏会場を自作していた。彼はタイの伝統的な歌を唄う。南下すると、バンロップが有機野菜の畑を拡張していた。彼の畑は海の近くだ。

最後にバンコクだが、その地ではサクダーだけを訪ねた。彼は街の片隅で暮らす不法入国者に食料を配布している。社会的距離が叫ばれる中、この国では若者の軍事政権に対する反発が、前例がない規模の抗議活動へと発展した。私はバンコクで、その活動を追いかけ、数時間分の素材に撮りためた。街の通りは、不満と希望に満ち溢れていた。そんな若者たちによる熱を帯びた演説とは対照的に、それまで私の2020年は、だいたい自宅で静かにしていた。

木々が新たな葉を茂らせた。飼い犬が病気になり、その治療をした。バナナが熟し、マフィンにした。そんな移ろいの中、私の不眠症は改善していた。快眠できるようになり、長い夢をみるようになった。自分自身が夢で探求している、とも知った。たいてい夢と現実が双方が近づくまで影響しあうのではないか、と思った。吸引とでも呼ぼうか。起きている時、私は近所だけど今までに訪れたことがないような場所まで歩いたり、車で行ってみた。朝には、夢をメモすることもあった。昼には、山々や滝、地元の温泉を撮影したこともあった。

西二丁目地下歩道映像制作プロジェクトを構想する段階で、2001年に初めて札幌に滞在した時に会った友人たちの写真を見てみた。タイで私が仲間を訪ねた時と同じ感情が、札幌の友達らに対しても広がった。そこで、友情の証として、ビデオレターをつくることにした。それは、私の2020年を伝えるビデオになる。植物、光、季節が移ろう香り、大勢の若者が発する活力、命が消えゆく哀愁、新たな春への動きを、ここに共有したい。

行ったり、来たりと巡りゆくものが、私に感謝の念を与えてくれた。ここに送る光の手紙が、大陸をまたいでも、私の憧れや愛情を共有する一助となることを願ってやまない。

2021年1月29日、チェンマイにて
アピチャッポン・ウィーラセタクン